



—湾岸・アラビア半島地域ニュース—

サウジアラビア：新内相の任命は王位継承問題に大きな波紋、国王の狙いは？
湾岸地域の経済・金融・エネルギー問題専門家 中嶋 猪久生

11月5日、アブドゥラー国王は、アフマド内相を更迭し、6月に死去したナーイフ皇太子の息子ムハンマド内務次官を新内相として任命した。今回の人事は“アラブの春”の高まりと、政治・社会改革を求める動きの中で、ムハンマド新内相の登場は、第三世代の有カプリンス達による新たな王位継承レースの幕開けとなりそうだ。また、今回の昇格人事の背景や国王の狙いは何か？

● アブドゥラー国王は何故アフマド内相を更迭したか？

サウジ政府閣僚の任免は、すべて国王の権限の下で実行されるが、通常、健康問題の場合を除き、短期間(アフマド内相の場合、就任後5カ月)でいきなり更迭することは極めて稀なことである。次のようないくつかの噂が流れている。

- ① 元々、内務省は、ナーイフとムハンマドの父子が主導し、治安問題やテロ対策を実行してきた。他方、アフマド(ステイラー族出身、ナーイフの実弟)は同省の日常業務を担当したに過ぎず、内相としての器ではなく、イエメンや東部州で高まるシーア派の騒乱に対応する能力に欠けていると国王が判断した。
- ② アフマドは自ら辞任を申し出たというが、彼の性格からしてそんなことはありえない。
- ③ アフマドは5カ月前、内務副大臣から内相に昇格したが、その直後から、これまで数年間、内務省を効率的に運営してきたムハンマドに近い幹部を次々と遠ざけた。ナーイフやサルマーン皇太子の実弟として王位に就くという意欲を示したことはなかったが、内相となることにより野心を燃やしたのではないか。
- ④ 国王は、2005年王位を継承して以来、原理主義を標榜する聖職者の権限の抑制、宗教警察の改革、大学での男女共学、女性による参政権など政治社会改革路線を進めてきたが、アフマドは適切に対応し切れているとはいえない。
- ⑤ 国王による突然のムハンマド新内相の任命は、彼の能力を評価し、政府の重要閣僚ポストに就けた人事である。国王は90歳に近く、存命中に政治社会改革の道筋をつけておきたいことと、第三世代の人材登用を図りたい、自分には残された時間は少ない、との意識が強い。

● ムハンマド新内相のプロフィールと業績

1959年ジェッダ生まれ、53歳。政治学修士、1999～2012年内務次官。国家反麻薬委員会や経済評議会常任委員会の委員。

父に協力して、国内の治安や2003年以降のアル・カーイダなどテロ対策を担当し、また、イエメン、バハレーン、シリア問題に対応してきた。国内の原理主義的急進派を懐柔し、帰順させ、社会に復帰させることに成功した(Munasaha計画)との評価を受けている。

内務省の改革はムハンマドが主導してきた。父の死後、叔父のアフマド内務副大臣(当時)にとって代わり、後任の内相に就任するのではないかという声もあったが、まだ若すぎるとして、アフマドが内相に昇格しても、副大臣に昇格することなく次官に留め置かれた。

父の右腕として、約13万人で構成される警察組織や治安部隊を動員し、国内の治安・テ

口対策を仕切り、“アラブの春”の高まりで、政情が不安定化しているエジプト、バハレーン、イエメン、シリアなどとの外交を主導してきた。ナーイフの死去により大きな政治的空白が生じることが大きく懸念されたが、これまで乗り切ってきたことが国王の信任を得たともいえよう。

伝統的な保守層、特に宗教界の支持を受けたナーイフは、アブドッラー国王の政治社会改革に批判的で、人権を重視する米国との関係が懸念されていた。ムハンマドの場合、2010年10月、彼が率いる治安部隊がアル・カーイダによるイエメンから米国行き航空機爆破計画を米国に通報し、未然に防止するなど米国との関係は比較的スムーズにいつているようだ。

米国のメディアから“テロ戦争の将軍”、米国や欧州の当局者からは“世界のテロ掃討作戦で最も効果的な作戦を遂行できる人物の一人”という声も聞こえてくる。

● ムハンマドの内相就任が王位継承問題に与える波紋

ムハンマド新内相就任は、サプライズ人事として受け止められている。同年代の第三世代(第三代の故ファイサル国王の息子サウード外相を除く)の有カプリンスが次官クラスにとどまる中で、国家を支える有力閣僚に就任し、王位継承レースで頭ひとつリードした形になったからである。

また、アブドッラー国王が、異例の速さで今回の人事を行ったのは、第二世代の中で自分と同様、健康不安説がささやかれるサルマーン皇太子の後も、サウード家による統治を前提として、国内改革を推進していくため、第三世代へのスムーズな権力移行を望んでいるようにみえる。

また、王位継承問題で、内相というポストは大きな意味を持つ。第三代ファイサル国王や第五代ファハドも国王に就任する前に内相を経験したように、このポストは「国王」への登竜門ともいえる。内相及び内務省へは、国内の治安・政治活動・部族や反体制派の動きなどの動向について関係省庁に先駆けて、直接報告される。また、メディアのコントロールも内務省の管理下にある。この意味で、ムハンマド新内相の力量が大いに問われることになる。同国の権力構造の中で、国王(兼首相)がNo. 1、サルマーン皇太子(兼副首相・国防相)をNo. 2として、サウード家出身の有カプリンスの中で、誰がNo. 3(第二副首相)になるかということが、今、最大の関心事となっている。

今後の王位継承レースで注目されている第三世代の有カプリンスは次の通り。

【ファイサル系】(第三代ファイサル国王につながる家系)

サウード 71歳、外相、アブドッラー国王が皇太子時代から親密な同盟者、第三世代のリーダー的存在、健康不安説あり。

ハーリド 71歳、メッカ州知事、サウードの実兄。

【ステイリ系】(第五代ファハド国王を中心とするステイリ・セブンの家系)

ハーリド 63歳、国防省副大臣、故スルターン皇太子(兼国防相)の息子、ステイリ一族の第三世代では最年長。

ムハンマド 60歳、東部州知事、故ファハド国王の息子。

ムハンマド 53歳、内相、故ナーイフ皇太子(兼内相)の息子。

【その他】

ムトイブ 60歳、アブドッラー国王の息子、国務大臣兼国家警備隊長官。